

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 7 1 号

2024 年 11 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (5)

内村鑑三先生のロマ書の注解の深さ

これは教会の単一性、教会の単一性の創造、教会の単一性を神が創造した、そういう教会は一つである、ただ一つであると、そういうことについて、第 2 章 11 節から 22 節までにパウロが述べた場所でありまして、これがエペソ書の教えの中心をなしている。

このキリスト教の教えを学びますのに、われわれ日本人は非常に私は恵まれていると思うのであります。われわれの祖先が、数百年にわたりまして、仏教において学びましたところが非常に参考になるのでありまして、私はこの日本に生まれ、特に自分の家が浄土宗の関係の家に生まれたということ、私はこの年になりまして、非常にいよいよ深く感謝しているわけであります。

聖書を読みましても、われわれの祖先の信仰、仏教において学びました、そういう信仰なくして読むのと、そういう信仰を少しく学んでそういう精神

で読むのと、ずいぶんこのキリスト教の深さが違ってくる。私は、いつもこれは申していることでもありますけれども、私は将来、聖書の最も深い注解書は東洋人から出るような気がするのであります。

私はロマ書を 55 年学んでおりますけれども、もちろん外国語を読む力はありませんから、外国の立派な著書を十分に読みこなすことはできませんけれども、例えば世界で有名なロマ書の注解書を数冊読ませていただきましたけれども、内村鑑三先生のロマ書の注解と比べたら、特にこの内村先生のロマ書の注解の深さ、特にパウロが非常に強調しているところの望み、復活するということに対する註解の仕方は、世界の大先生と比べまして、内村鑑三先生の注解というものは、私は際立って優れているように思う。

そうですから、天国のこと、復活のことについては、むしろ世界の大先生よりも内村鑑三先生の理解の方が、高い低いは言えませんが、日本人の過去千年の研究というものが、内村鑑三をしてその深い理解をなしたものであろうと、私はそう思うのであります。私の考えは間違っているかもしれませんが、これは歴史が証明する。これから 21 世紀、22 世紀と、世界の歴史が私のこの意見を証明すると思うのであります。

希 望

信者と言うものの最も大きな特徴は希望。これ〔2章12節〕は、冠詞がついておりませんから必ずしも復活の希望だけを指しておりませんが、この希望のうち、もろもろの希望のうちの中心的希望は復活の希望なのです。復活の希望、すなわちキリスト来給う、再臨し給うときに、キリスト来給う時にわれらは復活させてもらう。キリストが復活した如く、我らも復活させてもらって永遠にキリストとともに生きる。これが希望、この希望と書いてあるうちの中心的希望です。これがあるかないかということが、信者・無信者の最も中心的特性なのです。

そうですから、救いというのはこれを言う。救いというのはわれらが救われた。この前に学びました新生、新たに生まれると言ったら、この永遠の命、復活するものにしてもらおうということ、これを救いと言う。

いつも同じことばかりになりますけれども、これがはっきりしていない。教会に行ってると言っても、最も大切な問題、教会において最も大切な問題はこの問題です。永遠の命を持っているかいないか、復活する者か、復活しない者か。これが信者・未信者の、これが分かれる点になる。この点をはっきりと学ぶ必要がある。

ロマ書の結論

この「希望」という字は、ロマ書では、15章13節、ロマ書の結論と言う場所において、ロマ書の結論、ロマ書全体は、「希望の神が聖霊によって、この希望をあなたがたに、満たさんことを」ということでロマ書は終わっている。その時の「希望」という字は、「希望の神」、それにこの「希望」という字には、皆定冠詞が付いている。そうですから、これはもう天国の希望、復活の希望のことなのです。この天国の希望、復活の希望を、神様が、この天国復活の希望を、聖霊によって汝らに満たさんことを、ということでロマ書は終わっている。そうですから、ロマ書全体は、一言で言えば、永遠の命の希望が、聖霊によって、お前たちがその希望に満ちあふれるようにならんことを、と言うためにロマ書は書かれている。それはロマ書には定冠詞が付いている。

しかし、ここには定冠詞が付いていないから、これは復活の希望というだけではありません。ここはそのほかのいろいろの希望も含んでおる。しかし、そのいろいろの希望の中心的希望は、復活の天国へ行くという希望です。高円寺東教会へ来ていただいたら、ほかのことは何もできんでもよろしい。私は天国へ行くのである。天国で復活させてもらうのである。なぜか、イエス・キリストの贖いがあるからです。自分の信仰、自分の行ない、そんなものによらない。ひとえに、イエス・キリストの贖いによって。

イエス・キリストにあって エン・クリストウ

「ところが、あなた方はこのように以前は遠く離れていたが、今ではイエス・キリストにあってキリストの血によって近いものとなったのである。」(エペソ 2:13)

「イエス・キリストにあって」というのは、イエス・キリストの贖いを信じていることを、「イエス・キリストにあって」と言う。パウロのこれは一枚看板、「エン・クリストウ」、「キリストにあって」というのはパウロがいつも言う言葉である。「イエス・キリストにあって」というのはどういうことかという、イエス・キリストの贖いを信じるということなんです。

それで次。「イエス・キリストの贖いを信じて、イエス・キリストの血によって」、またこれパウロは贖いを説明している。イエス・キリストの血、十字架の贖いを出しているのです。「イエス・キリストの血によって近いものとなった」というのは、神に近いものになった。神に近いものになる。すなわち、永遠の命を頂くというのは、ひとえにイエス・キリストの贖いによる。これを福音という。キリスト教の福音というのは、イエス・キリストの贖いです。自分の信仰、自分の行ない、自分の心の状態とか行いの状態とか、人格とかそういうものによらない。ひとえに、イエス・キリストの十字架の贖いによって、われわれは神の言葉に従い、永遠の命を頂く、これを福音という。

贖いを信じて信仰を継続する方法

そしてその福音の信じ方、その贖いを信じて信仰を継続する方法は、ロマ書 10 章においてパウロが述べたごとく、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶということにある。この単純なる方法、「わが主イエスよ、わが主イエスよ、」と主の名を呼ぶという方法が、この贖いを信ずる信仰に入り、この信仰を継続する、この方法として主の名を呼ぶという方法を考えた。これが、ヨエルは預言した。「主の名を呼び求めれば救われる」ということをヨエルが予言した。そうですから、それをロマ書 10 章によってパウロが言った。そうですから、この贖いの信仰に入り、この信仰を継続する方法は、「わが主イエスよ」と称えることです。

こういう理解は、日本人の祖先が千年間勉強してきた、救い主の名を呼ぶ、あの彼らの経験を通して、我らははっきりとそれを言うことが出来る。これは、パウロのロマ書第 10 章の「主の名を呼び求める者は救われる」という言葉は、まだ決してキリスト教の新教の西洋の学者は注目していない。これは東洋人が、このロマ書 10 章 13 節の深い意義を闡明する義務と特権を持っている。

コリント前書第1章30節—智、義、聖、贖い

コリント前書1章30節に、イエス・キリストは神に立てられて、我々の智と義と聖と贖いになったと。我々の智慧、義、聖、贖いとなり給えりと。イエス・キリストが我々のすべてとなったということです。

ヨハネ、ペテロというふうな方々は、あまり教義のことをごたごたごたごた説明しなかった。しかしながら、彼らはこの教義の根本である贖い、イエスの復活ということについては驚くべき正確に深く理解していた。ゆえに、ヨハネやペテロは、人類の教師として我々を導く力を持っているのです。あまりごたごた理屈を言わなかったけれど。

私は、この希望、復活の希望、これはキリスト再臨の時に復活するのですが、これも、これはわれわれ生きている間に再臨に会う人は非常に幸福な人です。われわれ大部分は再臨前に召される、死ぬ。その時にはヨハネ伝14章3節、すなわちキリストが来て、おまえが死ぬ時に迎えに来て、おまえを迎えて、私の国に連れて行くと、ヨハネ伝14章3節にイエスは約束した。われわれ大部分は、復活の前に天国へ連れて行ってもらう。このヨハネ伝14章3節、…これは本当に我々の生活の頼りになる。これが、われわれキリスト者を支えている。文句ですよ。こういうことがはっきりして来たら、我々に人生に対して生きる力が出てくる。悲しみ、苦しみに打ち勝つ力が出て来る。

後世を知る者を智者とする

何遍も同じことになりますけれども、石館夫人の御母堂は、この人生の悲しみ、苦しみに会われたときに、「わが主イエスよ、わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言って、この人生に苦しみを勝ち抜いてこられた。

われわれもまた、分相応に復活の望みと来世へのキリストが来てくださることを、分相応にこれを信じ望んで、そしてわれわれはわれわれの人生の悲しみ、苦しみに会ったときに「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と称えて、われわれの人生における義務を尽くすものになりたい。

蓮如上人が、「たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世を知るを智者とする」と言った。何も知らない尼入道であるとも、後世を知る、天国を知っている、これを「智者とする」と言った。智者であるか、愚者であるか、本当に我々はその希望を持ったときに、われわれの人生がそれを証明する。

観音経、「私の名を呼ぶものを救う」

もう一つ、日本民族が読んでまいりました仏教の法華経の第 25 章、これが観世音菩薩普門品でありまして、法華経の第 25 章は観音経と申しております。観音経というのは一語にして言えば、「わたしの名を呼ぶ者を救う」ということが書いてあるお経でありまして、観世音菩薩は、33 の姿を現して人類を救うということが言われております。この 33 という数字は、観世音菩薩と非常に関係が深い数字であります。

そういう意味で、今日はちょっと仏教のことを思い出しているのですが、日本仏教史において最大・最高の地位にいらっしゃる源空上人・法然上人は、旧 1 月 25 日お亡くなりになりまして、今日は旧の 1 月 24 日に当たっている。法然上人お逮夜（忌日の前夜）にあたります。そうでありまして、誠に今日は、私にとりましては非常に感銘深い日であります。

説教の場所は「教会の単一性」、教会は単一である、教会は一つであると、そういうことがエペソ書の中心問題でありまして、それが今日読んで頂きましたエペソ書第 2 章の 11 節から 22 節までに書かれている場所であります。これが、よく牧師の試験にいつも出る場所なんです。ですからこれは非常に大事な場所のようでございます。

徐々に

そうですから福音の真理というものは、徐々にわからされる。いつも言います通り、「徐々に」ということは私が好きな言葉でありまして、観音経の中に「生老病死の苦、漸をもって滅せしめ給う」と書いてある。生きる苦しみ、老いる苦しみ、病気の苦しみ、死の苦しみは漸次なくなると、観世音菩薩の力によって漸次なくなると書いてある。

そうですから、本当のものは漸次にくる。真理は漸次に来る。ぱっと分かるようでありますけれども、それは非常に浅薄な分かり方です。アウトラインだけわかっている。漸をもって自然に自分のものになる。真理というものはそういうものなのです。福音の真理もそれに洩れない。

イエス・キリストが我らの救い、賜物

われらの平和というものが本当に動かない平和であったならば、イエス・キリストがわれらの平和です。平和というものは賜物です。イエス・キリストはわれわれの賜物です。そうですから、われわれ側が、自分の方で、何もプラスして、われわれの方から信仰を持っていくとか、自分の行ないを持っていくとか、そういうものを助けにすることはしない。

源空上人が、「助をささぬ念仏」ということを言った。われわれの方から、学問をもっていたり、信心をもっていたり、行ないをもっていたり、何べんも称えるということをもっていたり、そういうものをプラスした称名はないんだと、助をささぬ、「助をささぬ念仏」ということを源空上人はおっしゃった。

われわれの平和も、われわれ側から何か持って行く行くような平和だったら、それは動く。イエス・キリストがわれらの平和、イエス・キリストがわれらの救い、賜物です。だから、われらの救いとか、われらの永遠の命というのは、これは賜物です。そうですから、それは信じ、それを信じ受け入れるほか手が無い。受け方、どう受け入れるかと言ったら、主の名を呼ぶ。「わが主、イエスよ」と主の名を呼ぶ。「わが主イエスよ、主は我が救いのイエスなり」と言ったらいい。イエス・キリストは我々の平和であると、ここに今日の真理がすべて出ている。

平和の原動力

要するに、イエス・キリストが我々の平和である。イエス・キリストが我々の贖いであるということがはっきりする時に、これがはっきりします。

そしてこれは、神学上の聖書解釈上の問題で牧師の試験によく出る場所であるのみならず、本当に異邦人とユダヤ人とが一つになる力をもっている、そういう福音が分かるということは、人生の平和の問題、人と人との間の平和の問題に、この原理によって、これが一番人と人との平和を持ちきたらす、これは人類の歴史に表れたる最も力ある方法です。これが夫と妻の間の平和、親と子の平和、あるいはまた友だちとの平和においても、すなわちイエス・キリストの贖いを通じて一つになるという、これが根本的な解決です。

われわれも信仰の年月に連れまして、いよいよ購いを通じて、永遠の命を通じて新しい人ととなって、人と人が平和になるという、人生においてこういう工夫が必要です。もし相手が分からなかったなら、自分一人がこの福音の原理を分かっただけでも、私は隋分、人と人との平和というものは非常に増進する、本当に平和になると思います。

われわれ信者が神様から聖霊を頂いて本当の信者になるときに、人類の生活に平和というものをもちきたらす、われわれはその原動力になり得るのでありましょう。